

若手教員の授業力向上を目的とした教師の連携・相互理解のあり方について

——中学校における学年内連携を通して——

○上野和広（八王子市立第一中学校）

山田雅彦（東京学芸大学）

I. 研究の目的

中学校現場では、これから数年の間に教員の大量退職・大量採用期を迎える。そのため、若手教員の計画的な育成、授業力の向上が早急かつ重要な課題となっている。

中学校において若手教員を育成していく上で大きな壁になっているのが教科担任制である。教科担任制では自身の専門外の教科について指導・助言、授業見学をするという傾向がほとんどなく、これまでは教科内での育成に限られてきた。しかし、若手教員は教科に関わらず他の教員の授業を見学することで自分の不足しているところを発見しうる。複数教科の担当者から成る学年全体での若手教員の授業力向上を目指した育成を行うことが大きな課題である。しかも、教員が若手の育成に割ける時間には限りがある。そこで、本研究では中学校における若手教員の育成のための方策として、学年内の教師間連携・相互理解のあり方を示し、それを推進していくためのプログラムの開発と、効果的な活用法を提案することを目的とした。

II. 研究の経緯

1. 若手教員の授業力向上のための課題の掘り起こし

(1)若手教員自身が授業を行う際の課題

八王子市内若手教員を対象に、「授業力向上」を図るために日々の授業で課題とされる10項目を設定し、質問紙調査を実施した。その結果、若手教員が教科の専門的な知識とともに、「学習規律」や「配慮を要する児童・生徒の対応」などについても大きな課題と考えていることが明らかになった。

(2)中堅教員・ベテラン教員が考える若手教員の課題

八王子市内の公立中学校1校の教員を対象に「若手教員が日々の授業を行っていく上で、困難や不安に感じていることはどのようなことだと思いますか」という質問紙調査を実施した。その結果、教科の専門性よりも、生徒との関わり方など授業運営のほうが若手にとって重要だと考える教員が多いことが明らかになった。

(3)生徒の授業アンケートより明らかになった課題

上記公立中学校の若手教員の授業において授業アンケートを実施し、若手教員の授業における課題を明らかにした。調査結果より、若手教員の課題として、授業の内容に興味・関心を持たせる教科の専門性、ノート記述の有無や私語の注意等授業規律に関して課題を抱えていることが明らかになった。

以上の調査結果より、若手教員の授業力向上を図るためには、教科の専門的な知識に加えて「授業規律」「特別な配慮を要する生徒の対応」など、生徒との関わり方にも課題があることが明らかになった。よって、同校をフィールドとして、同学年教員の連携によって、これら教科以外の力を育成していくこととした。

2. 授業相互観察と協議会のシステム開発

(1) 授業相互観察シートの開発

これまでの調査結果をもとに、授業規律、生徒との関わりに関する授業観察項目を 11 項目設定し、以下の 4 点に配慮しつつ「授業相互観察シート」を作成した。

- ・限られた空き時間を有効活用し、多くの授業を観察してもらうため、観察時間を 1 時間単位とせず、流動的なものとした（最低 10 分間の観察をお願いした）。
- ・観察項目は流動的な授業観察に特化した質問に設定しており、どのタイミングで授業観察に参加しても、その場面ごとに適したチェックができるようにした。
- ・どの時点で授業観察をしたのかを明確にするために参観時間を記入できるようにした。
- ・授業案によらず、どの教科の授業においても共通して使用できるフォーマットとした。

(2) 書き込み回覧方式による協議会

授業相互観察期間の最終日に協議会を実施した。協議会は、以下の 5 点に配慮しつつ書き込み回覧方式で行った。書き込み回覧方式の導入に際しては、同方式に造詣の深い池田修氏（京都橘大学）の助言を受けた。

- ・気軽に参加してもらえるように各自の持ち物は授業相互観察シートのみとし、筆記用具等は共通のものを準備した。
- ・一人あたりの書き込み回覧時間は 2、3 分程度とし、他の教員の自由記述欄の確認と自身の意見の追加記入だけとして、書くことに専念してもらった。
- ・協議会を文章化し、多くの教員の意見に触れる機会を増やした。
- ・授業相互観察シートを学年教員内で回覧することにより、それぞれの教員（他教科）の授業観察のポイントを学年教員全員で共有することとした。

- ・協議会の終了時刻を明確にし、参加意欲を高めた。

3. システムの効果測定

(1)生徒対象アンケート・授業相互観察シートより

①9月から11月の計3回行われた若手教員の授業相互観察と協議会の終了後に授業アンケートを生徒対象に実施した。授業アンケートより、若手教員の課題は、3回の授業相互観察を通して大きな変容が見られ、授業の内容に興味・関心を持たせる教科の専門性、ノート記述の有無や私語の注意等、授業規律に関して大幅な改善を確認できた。

②計3回の授業相互観察シートを活用し、若手教員の変容を明らかにした。同じ生徒を指導する学年教員が授業相互観察をしたことにより、教科の専門的な内容ではなく、どの教科における指導でも共通する、授業規律や生徒との関わり方の視点から若手教員の授業を確認することができた。特に、生徒の意見や活動の取り上げ方、褒め方、板書の読みやすさなどについては具体的に指摘してもらうことで大幅な改善につなげることができた。

(2)聞き取り調査より

①被観察者であった若手教員への聞き取り調査により、以下のような意識の変化が認められた。

- ・授業中の指示の出し方については、全生徒に指示が通るまで必ず待ち、今何をすべきかを明確に指示し、全員が目標達成できるようにつとめた。
- ・板書の際には、強調すべきこと、しなくていいことの色を使い分けなどチョークの使い方を工夫し、グラフや表の大きさ、書く位置にも配慮するようになった。
- ・板書中に生徒がノートに書いているところを注意して確認できるようになった。

②観察者であった同僚学年教員への聞き取り調査により、同僚が若手教員の意識に以下のような変化を読み取っていることがわかった。

- ・客観的に見られることによって、言葉使いや、黒板の字の大きさなど意識して改善していた。
- ・授業や生徒との接し方に改善が見られた。

4. システムの副次的効果：学年の同僚性の構築

(1)授業相互観察・協議会参加者の変容

3回の授業相互観察を通して、回を追うごとに授業観察者が増えていった。それに対応するように一人あたりの授業観察時間も次第に長くなっていき、1回目の平均観察時間は16.25分であったのが、2回目には17.5分、最後の3回目には27.9分となり大幅に増えていった。特に3回目は進路指導の時期と重なり、時間を確保することが難しい状況であったが、多くの教員に長時間観察してもらうことができた。

(2)所属校全教職員による同僚性調査

3回の授業相互観察および協議会終了後に全教職員を対象に学年内の同僚性を調べる15項目の同僚性調査を実施し、授業相互観察・協議会を実施した学年とそれ以外の2つの学年の同僚性について比較検証を行った。調査結果より、ほとんどの項目において、授業相互観察・協議会を実施した学年の方が、実施しなかった学年よりも高い数値を得ることができた。このことにより、授業相互観察・協議会を行うことにより、学年内の諸問題に対して共通意識のもと協力し、困難が生じた場合には、同僚に援助や助言を求めることができるなど学年内の連携がスムーズに行われるようになったことがわかる。また、若手教員も中堅・ベテラン教員も意欲、個性が大切にされていると意識できるようになった。同僚教師への聞き取り調査からもこのことが示唆された。

III.まとめ

若手教員の授業力向上という一つの目標のもとに、授業相互観察および協議会というシステムを導入することにより、若手教員の授業力向上、教師の連携・相互理解、それらに費やす時間の確保、という三つの課題を一気にクリアすることができ、授業力の向上だけでなく、一つの学年内の同僚性を高めることに成功した。若手教員が増加している今、課題ばかりが叫ばれているが、このシステムによって若手教員がいることのメリットも現すこともできたのではないだろうか。

なお、本研究で開発した授業相互観察シートや協議会の実施要領については、リーフレット形式で公開している。リーフレットは下記URLからも入手可能である。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~yamadama/papers/ueno2010.zip>

謝辞

本研究に際し、質問紙調査にご協力いただいた八王子市教育委員会、各種調査とシステムの試行にご協力いただいた八王子市立第一中学校に厚く御礼申し上げます。